

調査・分析レポート

最近の化学兵器関連事案から見る脅威認識の捉え方

帝国繊維株式会社 顧問 **岩城 征昭** (理学博士)

1. ソールズベリー(ハーグ)～ダマスカス ～クアラルンプール 化学兵器の今

(1) 英国ソールズベリー

6月初旬に、ロンドンから2時間程列車にゆられてソールズベリー駅頭に降り立った。駅前には市の中心部から外れているため、空き地は通勤客の駐車場と自転車置き場。駅前ロータリーなどもなく数台のタクシーが客待ちしているだけ。日本の地方路線の各駅停車駅のようなひなびた駅舎。中世の有名な大聖堂とストーンヘンジが近傍にあるため、以外と観光客の姿があちこちに見られるものの、文字通り「鄙びた」街である。

ここで数ヶ月前に東西冷戦時代を彷彿とさせる暗殺未遂事案が起こったことなど思いも寄らない人口4～5万の田舎町。主な被害者は、8年程前に英国に亡命した元ロシアスパイ Skripal 大佐とその娘及び第1発見者となった警察官1名。これは Novichok という神経剤により昏睡状態で発見されたことに端を発した。Novichok (ロシア語で Newcomer : 新参者。Novice : 初心者とも訳される) という名前から推測されるように旧ソ連時代に秘密裏に開発された猛毒の神経剤と特定されたことから、英国のメイ首相は議会等で、本事件は背後にロシアが介在する暗殺事案であると激しく非難した。その後駐英ロシア大使館の外交官を強制送還。ロシアも糾弾の根拠不明として英国外交官を国外追放。

安保理でも非難の応酬合戦が繰り広げられ、現在も混沌とした情勢になっている。

私が訪れた時は既に事件から3ヶ月が経過し、街はほぼ普段の様子を取り戻したとのことだったが、発見現場、立ち寄り先のレストラン、パブなどは未だに立入禁止のテープと目隠し看板、それに複数の警官が立哨していたことだけが事件のあったことを伝えていた。

一方、被害者に関しては、3人とも一命を取り留めて回復に向かっているものとみられ、特に Skripal 氏の令嬢はメディアに対するビデオ声明で無事が確認された。その後、当の Skripal 氏も重篤な状態を脱して退院した旨報道があったが、これからの行方は杳として知れない。恐らく英国政府の厳重な保護下にあるのだろう。

(2) Novichokとは

さてそれでは、何故英国はこの暗殺未遂事案の当初からロシアの関与を強く主張したのか。また何故 Novichok という特異な名称が世間の耳目を集めたのか。ことは、1992年にアメリカに亡命した Vil. Mirzayanov という旧ソ連化学兵器研究施設の化学者からの情報に端を発している。時あたかも化学兵器禁止条約 (CWC) の署名式がパリで開催される直前の出来事である。彼によれば、当時の米口は、Novichok の存在を知りつつも条約確定を優先して敢えてこれを条約に明示しなかったと非難してい

た。(実際 CWC の附表剤に Novichok 類縁体の記述はない。) この Novichok 情報については、従来最も毒性の高い軍用神経剤 VX よりも 5～8 倍と毒性が高く、しかも検知、防護、治療手段を無効化するのではないかという噂が飛び交い、関係者の間では大きな懸念事項と認識されていた。現に米国では、新興脅威物質 (NTA: Non-Traditional Agents) と称して戦用化学剤と区分しつつも、国土安全保障省作成の化学テロ脅威対象物質 128 種類の中に、Classified compounds No. 1～No. 7 として記述されていることから窺い知ることが出来る^{*1}。ちなみに数年前に米国は既に毒性評価を終え、検知、防護等他の試験評価のために大規模試験施設を整備し、研究を続けている。

一方、英国では不幸中の幸いともいおうか、Salisbury 近郊には、高度な分析能力を有し、化学兵器禁止機関 (OPCW) による認証ラボとしても有名な国防研究所である DSTL / Porton Down がその分析に当たったので、まず彼等の主張する Novichok 説に間違いはないとの第一印象であった。

(3) オランダ・ハーグ (OPCW本部)

筆者は、OPCW の主催する「化学テロ対処会議」に参加する傍ら、さらに野次馬根性を発揮して、前項で述べたとおり Novichok に関する情報を得ようと試みた。つまり英国は、自らの DSTL の分析に加え、OPCW に対し CWC の規定に基づき、機関独自の検証を要請し、自らの分析結果の追認を得たと承知したからである。幸い、オランダ立ち寄り時に OPCW 関係者から、報告内容について若干の情報を得ることが出来た。それによれば OPCW の報告内容には、Novichok の分析結果 (実際には化学式。事件発覚から 3 週間程経過した後のサンプリングだったが、加水分解物も検知されず、不純物の殆どない純品であったそうである。) のみで、その物質の毒性などの細部は記述されていないようである。

OPCW の調査報告書本文は、本件が特に英口間で外交的な問題になっていることから、機関として中立性を維持するため、「英国の要請に基づく技術援助に係わる活動報告書」(OPCW Confidential Information: 秘扱い) として厳格な秘密保持がとられており、現物は示されず若干の質疑応答のみであったが、おそらく Mirzayanov が曝露した

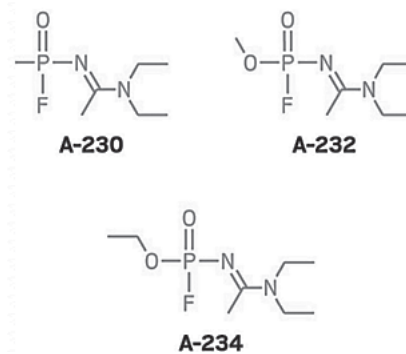


図1 Novichok類縁体の一例

Novichok 類縁体のうち、A-230、A-232、A-234 のいずれかが特定されたものと推測できる (図1 参照)^{*2}。

(4) 置き去りにされた真相究明

さて英口を主体とした外交合戦の様相を呈している本事案であるが、著者にとって不可解なのは、VX の 10 倍近い毒性といわれる Novichok による暗殺行為だとしても、直接の被害者 2 名は、既に回復して (脳障害等後遺症は不明であるが) 公衆の前から姿をくらし何処かで保護されていることであり、実行犯に関しては一切明らかになっていない。しかしながら暗殺工作であったとすれば、随分と手際が悪かったとの印象が残る。Novichok 自体は、VX より合成は容易で、英米はもとよりイラン、ウクライナ等も合成関連情報を有しているとの指摘もある。つまり構造情報さえ明らかであれば、「誰でも」合成可能と考えられるため、過去ロシアが秘密裏に開発したとしても、イコール実行犯と決めつけるのも難しい (動機はさておき)。これは、後述するマレーシア・クアラルンプール空港における金正男の VX 暗殺事件においても、またシリア内戦におけるサリンをはじめとする化学攻撃においても然り。釈然としない思いを持つのは筆者だけであろうか。何故、時が経つうちに全て闇の中に葬り去られていくのだろうか。次項では、Novichok 事案の 2 ヶ月前に巷間を賑わしたシリア内戦の化学兵器問題について触れておきたい。

(5) シリア内戦での化学兵器使用問題その後

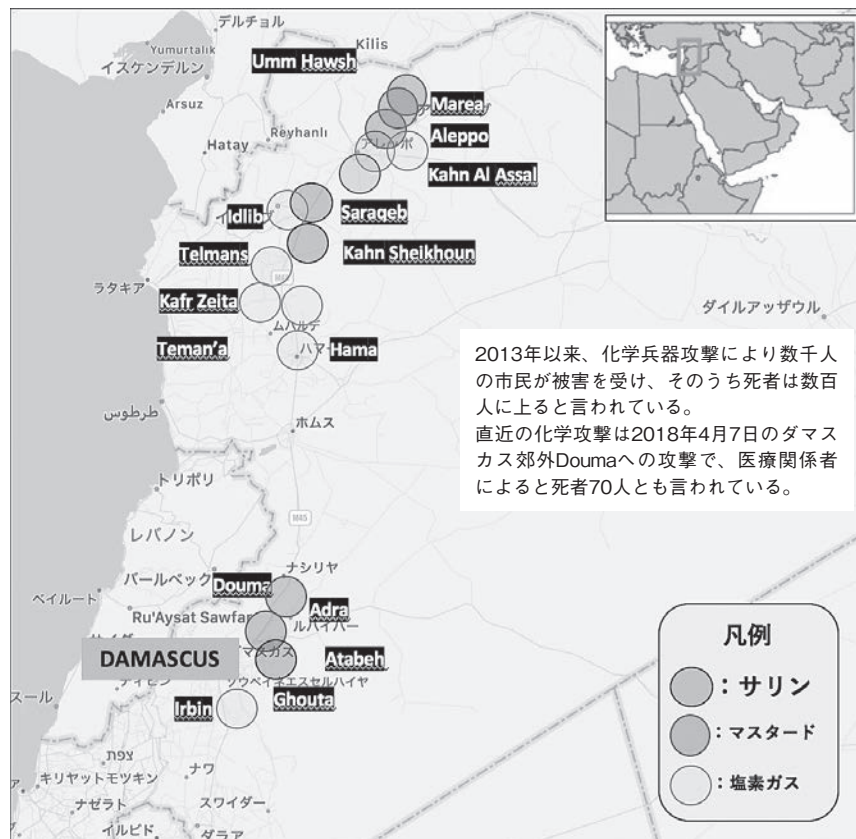


図2 2013～2018年4月までのシリア国内における化学攻撃の状況（筆者作成）

さて中東シリア内戦に伴う化学兵器使用問題は、本ジャーナルにも累次投稿させて頂いたが、最大の転換点は、2013年8月に首都ダマスカス郊外の数カ所においてサリンによる大規模な化学兵器による攻撃があったことであろう。詳細な死傷者数は不明だが、千人を超えるものと報道されていた。その後西側のアサド政権に対する攻撃圧力（未然）とロシアの仲介により、アサド政権はCWCを批准、時を置かずしてOPCWへの申告とその査察を受け、引き続き申告兵器、生産施設等の全ての廃棄をOPCW及び第3国の支援を得て2016年初頭に完了した³。

しかし化学兵器の話題が終わったと思ったのもつかの間。それ以降もシリア内戦では、塩素ガスを主体とした化学攻撃が継続していることがさらなる問題を引き起こすことになった。シリア軍は既にOPCWの監視下に、神経剤サリンやびらん剤マスタードは全量廃棄したはずであるが、塩素ガスそのものは工業的利用価値が大であるためCWCの附表には含まれず、従って保有すること自体、産業活動自体は禁止対象とはなっていない。ただしCWC2

条の定義にいう「化学兵器」のうちの「毒性物質」に該当することから、既にOPCWが検証している塩素ガスボンベを改造した樽爆弾による攻撃は、まさしく化学兵器使用に当たると解釈できる。しかし何故か2015年以降、度々の報道にもかかわらず西側各国は手を拱いた感があった。これは先のGhoutaにおけるサリン攻撃と異なり、OPCW主体の調査活動（FFM：Fact Finding Mission）に終始していたからともいえる。即ち、安保理が関与するUN-OPCW等の合同調査（JIM：Joint Investigation Mission）の場合は、報告後の制裁攻撃の錦の御旗となり得る。一方FFMでは、そこまでのマンデートは与えられていないからかもしれない。

(6) しかし今年4月に再度ダマスカス近郊のDouma地区に対して大規模な化学攻撃（塩素ガス主体。欧米諸国は、サリンも使用されたと主張。）が行われ、70名近くの犠牲者が出たケースでは様相が異なった。事ここに至って、米国トランプ政権は、英、仏とともに、アサド政権による化学攻撃であるとし